

「ドイツ・ロマン主義の風景素描」鑑賞会 報告

◇日時:7月20日(日) 13:30 から

◇場所:国立西洋美術館

2003 年度例会として7月20日(日)に国立西洋美術館で開催されていた「ドイツ・ロマン主義の風景素描」を企画致しましたところ、多くの方にご参加頂きました。作品の鑑賞のみならず講演に参加することで、より興味深い鑑賞会になったのであれば光栄です。

例会を実現させるにあたって沢山の方のご協力を賜りました。ここにお礼の言葉とさせて頂きたいと思います。

◇今例会の趣旨

この展覧会は、「風景画帳」と呼ばれるユリウス・シュノル・フォン・カロルスフェルト(1794-1872)の作品を中心に、ドイツ・ロマン主義の風景素描を紹介するものです。シュノルは10年におよぶローマ滞在中、旅行先に素描道具を携帯し、自分が心魅かれた風景を記録しました。風景画帳は、ドイツに帰国したシュノルが、イタリアでの風景素描から115点を選んだアルバムです。

またその他にも、シュノルの関係の深かった、ヨーゼフ・アントン・コッホ、カール・フィリップ・フォーア、オリヴィエ兄弟などの素描も展示されます。

19世紀ドイツの素描を充分に楽しんでいただくと共に、素描が果たした芸術的役割、芸術家のあり方も見出して頂けると幸いです。

◇参加者から感想

今回の講演は、19世紀北ドイツの風景画家 C.D.フリードリヒの素描を通して、彼の作品の真髄に迫る大変興味深いものであった。

フリードリヒは、ドイツ人画家グループの「ナザレ派」と同様、素描を重視した人であった。19世紀においては、今日のように屋外に画材道具を持ち出し、写生する習慣はなかったそうである。画家はあらかじめ構想を決めて出かけるか、将来の作品に使うであろうパーツを集める為に写生に赴くという2通りの方法をとった。フリードリヒは専ら後者のタイプで、収集した素描のパーツをアトリエで合成して全体図を完成させた。その為、彼の作品は風景の断片を描くものであり、人為的な構図で完結したものではなく、外に無限に広がっていく印象を与えるのである。彼をこのような手法に駆り立てた理由の一つはシュライエルマツハーの思想との出会いである。シュライエルマツハーは、キリストを宇宙とするキリスト教論を唱えた人物である。実際の風景を見ることが出来ない人も芸術家の描く風景画を鑑賞することで神と通じ合えるのだという考え方をフリードリヒも支持した。もう一つは転変する世界観を重視したことだ。彼は人間の死期を自然の転変や四季と重ね合わせて描いた作品を残しており「今」を重視した人であった。芸術家としての使命と転変する世界観が彼を創作に向かわせ、完結していない風景画の向こうにもっと広がりがあることを伝えようとしたのである。

世界は移り変わり、生あるものはいずれは死を迎えるが、「今」を重視した彼の作品からは、命あるものの尊さと広大な世界を感じることができる。同時にまた一つの疑問も浮かび上がった。自然と触れ合うことは、神と通じ合うことであったのなら、彼はそれによって何を求め、そしてそれを作品の中にどのように表していったのであろうか。このような疑問が生まれるのも、完結していない彼の風景画の魅力の一つであろう。

ご意見ご感想は[例会担当](#)までお寄せ下さい。

[サブゼミのページに戻る](#)

[トップに戻る](#)